
最強のN P C共（仮）

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強のNPC共（仮）

〔ZΠ-γ〕

N
6
8
3
3
Y

【作者名】

アリス法式

【めいすじ】

何で転生した場所が『三千年後』、俺は赤ん坊で。

この腐れ女神が―――。

といった感じで勇者と魔王の兄弟が世界を救つたりしたりしなかつ

たつする状態である。

勇者と魔王（前書き）

一話一話短めにのんびり更新。

「くははははは、そのでござかのう、勇者よ」

何枚も張り巡らされた結界魔法の中心でいかにも魔王、といった姿をした化け物が妙に高い声で高笑いをつづけていた、勇者と呼ばれた少年はボロボロの体でありながら、瀕死状態のなまをかばうように魔王の前に立ちふさがっている、

「なんじゃ、すでに返事をする気力まで失ってしまったようじゃのう」

「う、うるさい、魔王」

なんとか、声を絞り出しがそれが最後の力であつたようで、勇者はそのまま地面に倒れ伏した、

「くそ、ここまでか、だが、覚えておけ魔王、僕が倒れても第一、第三の勇者が…」

「勇者よ、それは、魔王のセリフじゃ」

「…………」

呆れたよつて言つ魔王に対し、勇者は少し迷つてから言葉を続ける、

「たとえ、この身、何度もおれよりも、我が命、我が魂が朽ち果

てるまで神々の力で何度も蘇り貴様の前に立ちふさがるだらつ

「それで、高笑いしたら、完全に魔王じゃな……しかも、戦い方が蘇生頼みとは、魔王どもか、それ、もうゾンビじゃね……」

「…………」

勇者視点

くそ、何なんだこの魔王ってやつは、エンカウントしたと思つたら、速攻で僧侶（女）と、魔法使い（女）と戦士（女）をムチャクチャチートくさい、魔法で葬りさつたくせに、僕に対しては、ねちねちと死ねない程度のダメージでいたぶつてくれる…

とつ、思えば面倒そうに僕のセリフに対していくつか、ツツツツミキを入れてくるし、よくわからん？

だかな、魔王お前の遊びのおかげで最後の一撃を撃つための時間稼ぎはできた。

いくぞ一か八かの

「我放つ聖光の一撃」《セイクリッド・ブラスト》

- - - - -
魔王視点

ふふふ、ほんとに飽きさせない奴じゃ、女三人連れて現れたときは、生き返ることが、できぬくらいまでバラバラにしてやろうと思いついたが、ていうかどういうことじゅう連れていの仲間がまえと違うとか、これなら、まえの戦士（男）三人連れた何がしたいのかよくわからんパーティーの方が遙かに増しじゃ…

て、そんな、話じやなくてのー、ん、勇者が何かやろうとしてるのー、どれ、少し反撃してやるか…

「我穿つ漆黒の三つ叉魔槍」（アラシ・ジャベリン）

勇者の身体を何十本の魔槍が貫く、それでも、勇者は口元に笑みをうかべていた。

「魔王、油断したな…」

魔王の身体を一条の光が貫き通していた、闇雲に放ったはずの一撃は、魔王の結界とともに、奇しくも魔王の核を撃ち抜いていた、

「クツクツクツ、久しぶりだよ勇者、何千年ぶりかの、これが死ぬ感覚とこりやつだつたかの、」

どいかうれしへり声色を発しながら、徐々に魔王の身体が虚空に消えて行く、

勇者も限界なのか、色の薄い瞳で虚空をじらむ、

「あよしならだ、魔王、一度と出会いな事願つてゐるが、

「つれないの、お主が臣なればこんな世界、詰まらぬではないか…」

「僕は、もういいんだ…終わること無い、この不毛な戦いも…お前のその見慣れた面を拝むのも…」

「見慣れた面…、おお、そうか、やじめやの、長き、遊びこそを合つともらつた礼もあるしの、」

何か納得したように、魔王がうなずくと、それ、つと一喝発して、その頭にかぶつてこたらし化け物の顔の仮面をはずす、そのままに、
「またのう勇者、輪廻の果てで合おうが、こつまでも続く終わらず無
き時の果てでの、」

「なつ、お…おんな…」

そう、一声かけると魔王は、ゆっくりと虚空に消えた。勇者の驚いた顔がさぞ可笑しかったのか、その口元に微笑を浮かべながら。

勇者と魔王（後書き）

今回も、書き溜めていたので投下します。
転生物のぞくで言つ一章ですね。

転生者 勇者（前書き）

— | 話題です。

転生者 勇者

「薄っすらとしていた光が瞬きを繰り返す」と、段々ハツキリしてくる。

またか、何度も転生を繰り返しても、あの腐れ女神と顔をあわせるのだけは、憂鬱だ。

「お帰りなさい、今宵の旅はいかがでしたか、『^{勇者}導き手』殿」

田の前には、B-L小説を片手に、女神様が紅茶を飲んでいた。

「ただいま戻りました、女神様。今回は、魔王を倒せたものの、私も命を失ってしまいました」

何時もの事なので、特に気にせず返事を返す、

「そう、お疲れ様。それで『^{勇者}導き手』殿、次はどこに行きたいですか？」

手元から少しも田線を話す様子が無いまま、少し頬を染めている女神様が聞いてくる。

「どこでもかまいません、女神様の御心のままに。と、言いたいところですが。一つだけお願いが、魔王のいないところでお願いします」

正直行く場所はどこでもよかつた、とりあえずこの腐れ女神様との魔王から離れられるなら・・・

「魔王、ああ、『^{魔王}序』のことですか。つまり、魔王である彼女がいなければどこでも良いこと言つことですね」

B-L小説を凝視したまま、返事をする女神様、てか、このお方さつきから一度も瞬きしていない、魔物よりよっぽど怖かつた。

「ええ、どこでもかまこません」

ちなみに、今まで繰り返してきた転生の中で、魔王の性別を知ったのは始めてだ。

といふが、なんども会つているのに、魔王に性別があると知ったこと事態が初めてだ。
いつもいつも、化け物の皮なのか、幻影魔法の一種なのかよくわからぬが、典型的な『魔王』然とした格好をしていたため気にしたことすらなかつたのだ。

そんな感じで、少しそれてしまつて気がする思考を悶々と続けていた所に、ありえない言葉が降つてきた。

「では、さつままでいた時間軸から三千年後に転生してください」

では、とは何だらう、確かにどこでも良いこと言つはしたが、三千年後だと。

脈絡が無む過ぎる、てか、一回くらいその手元のB-L小説から田を上げるよ、この腐れ女神様が泣くぞこのやうつ。
と、丘惑つ思考を押さえつけて、とりあえず疑問をぶつけでみるとこする。

「三千年後ですか、せめて、その理由だけでも教えていただきたいのですが、この腐れ……」

おつと、考えていたことがそのまま口から出せなった。

「理由ですか、転生の時間を決めるのは、私ではなく『時代』なのですよ、私は『導き手』を必要としている『時代』に、あなたを送つていてるに過ぎませんから」

腐れ女神様は、まったく顔を上げずに理不尽な言葉を、呑き続ける。

「わかりました、ではそれで納得する」として、三千年後に行つてまいります

まあ、このくわいだお方と問答をしてもしかたがないので、内心の動搖をもみ消して指示に従うことにする。ていうか、この人（人ではない？）は、一度言った言葉をかけて曲げないので、反論する意味がまったく無いのだ。

そんな感じの会話を終えて、体をリラックスさせると、ゆっくりと目を閉じていく。

転生のための準備だ、感覚としては、睡眠が一番近いかもしれない。

「では、おやすみなさい」『導き手』^{勇者}殿、最後の旅に光の加護があらんことを

薄れいく意識の中で見えたのは、手元から少しだけ田線をはずした女神様だった。

その表情が、少しだけさびしそうに見えたのは、僕の気のせいかもしないが……。

転生者 勇者（後書き）

感想などありましたらよければ。

転生者 魔王（前書き）

三話目です。

転生者 魔王

わたしが、転生の間に入つていくと、女神様がその手で優しく光り輝く球状の者を抱きしめていた。

「なんで、そこまで大好きなの?」いつも本で顔隠して氣の無い不利をするのかねえ、あんたは」

「な、ナンノコアレスカ、知りませんよ」

私は腐った林檎なんですから、とか意味のわからんことをのたまつてらつしやる方の頭を、ひっぱたいて、とりあえず意識を戻すかな。

「おーい、帰つてきんしゃい、この腐れ女神」

「ぶはっ、つて腐つても女の子ですよ、顔面はやめてください、顔面は」

腐つてもつて、勇者の前ではかつてつけられへせに私のまでといとこ繕おうとしないなこのお方は。

「これが、恋つてやつかねえ、甘酸っぱいねい」

「ぶはーー、つこい、鯉、淡水魚には興味ありませんからーーー

ー

なんかあせった女神様が、紅茶噴出しながらおもむりしてこいつをやる、おお、おもしろい。

て言つのは、置いといてこつからは少々まともな話だね。

「で、女神様、実際問題私たちが『三千年後』に転生するって言つのはなぜなんさね、それにわっさの最後の旅つて言つのも眞になるさね」

私が、会話を変えたことによつやく落ち着きを取り戻した女神様（腐）、

「で、（腐）てなんですか――――」

「なにに、叫んでんのや」

「うへ、世界の不条理にですか」

と、腐つた小説に顔うずめながら泣きまねしちよるけど、口がにやついてるって、女神様（腐）、

「あなたもですか――――、いえもういいです、これ以上いくと話が進みません

それで、なぜ『三千年後』かつて話ですね」

「やややや

「実は、私の力では直接『三千年後』に干渉できないですよ、多分

人間たちが何か世界に干渉したんだと思うんですけど

だから、実際に送るのは、十五年くらい前になると思います

なるほど、『三千年後』に何かある可能性があるから、それを調べてほし」と、で、実際送られるのはその十五年ほどまえつちゅうこ

「やな、まあ十五年で準備しりつて」とかいな、なかなか厳しい」と言つてくれるのな。

「十五年か、なかなか、厳しい」と言つてくれるのな

「まあ、初心に戻つたつもりで、楽しんでくれるところですよ」

初心? わかんない

「なんや、わから、今までの成長全部バーなんか」

「ええ、まあ、そうこいつです、『三千年後』に飛ばすつて言つのはそれだけリスクの高いことなんですよ」

「マジか?、それじゃ「わだか一百年待つたりしなくつやいけないんじや。」

「それは、大丈夫です『導き手』と『秩序』は対の存在ですから、ちゃんと回じ時空に落ちるよつてしますよ」

その言葉にちよつとほひとかわー、正直勇者たんが一百年も着てくれないとかなきやうになねといひだつたよー、

「それじゃ、最後の話ですね」

いつもも無く、まじめな顔の女神様（腐）

「わ、いこです。」

「何いきなり、こじけてんのや」

胸に抱きしめた勇者の魂にのの字をかくなや、

『氣をとりなおして、

「それじゃあ、最後の話ですね」

「なんや、わつきから最後最後つて、なんかもつ一度と会えない見たいやんか」

「ええ、そのままかですよ」

「な、」

「今までの、数え切れないほどの中生、それに今回の『三千年後』もの月日を越える転生、はつきり言って、お一人の魂はもうこれ以上、転生といつ輪廻に耐えられる状態ではないのですよ」

な、かなり驚きの報告やね、そつか

「じやあ、これでお別れなんか」

「ええ、やつこいつ」とになりますね

だから、さつきも勇者の魂抱きしめてないでおったんやな、私らは存在を付加されて、この世界の守り手として女神様に作られたんやから、子供みたいなもんやもんな、

「ふん、湿っぽい話はなしや、まなづちもこくわ」

「魔王たん、言葉使いがめちゃくちゃですよ」

「む、わかってるわ」

「ティッシュは持ちましたか、ハンカチは、だびしきない？大丈夫？」

「ああ、もう遠足前のお母さんかつて、大じょぶやから、安心して見送らんかい」

そう言って転生陣の上に立つ、ほな、いこか。
ひるひる、瞳に涙を溜めている女神様は見ない見ない。

「それじゃあ、こつてくるよ」

「うん、がんばってください・・・」

「いままで、ありがとうございました・・・、お母さん」

キューン、光に包まれながら静かに魂に還つていいく。
さよなら、おかあさん。

しばらく経つて、転生の間には、なきながら一人分の魂を抱きしめている女神様がいた。

「さよなら、クレア、サクラ

きっと、こえ今回こそは、二人とも幸せになるのよ

やさしく抱きしめた、二人の魂が静かに世界に還っていく。

そこにあるのは、今まで以上の困難だろう、それでも一人には幸せになつてほしかつた。

たつた一人の可愛い子供たちに。

転生者 魔王（後書き）

次でとりあえず今回の投下分はおしまいです。

「あら、 可愛い赤ちゃんですね」 b γ女神様（腐）（前書き）

とつあえず「転生編最後です。」

「あら、可愛い赤ちゃんですね」女神様（腐）

そこにあるのは静謐な闇にして、暖かい空間。

俺の意識が戻ったのは一寸前だった。

きっとここは俺の母親に当たる人の、お腹の中なのだ。

そこまで、理解してしまさらながら子供に戻ってしまったのかと心底後悔する。

だって、あれだぞ、なんていえばいいんだ、ここ最近はある程度年をとった状態で転生してたからな。

氣恥ずかしいというか、魂の年齢的には何千歳経っているかわからぬ俺だぞ。

と、そこまで考えて、この母体という空間にもう一人、先客がいることを思い出した。

と、言つてもおれは今意識が戻ったといつ話ですつと一緒にいたのだろうが。

そうだな、この子は、男の子だろうか、女の子だろうか。

きっと俺は遠くない未来に旅に出ることになるだろうが、それまでこの子を大切にしてやろうとなんとなくそう思った。

ん、世界が明るくなつた、もしかしたら生まれるのかもしね。

— 一
— 一
— 一
— 一

そう思つていたら、自分の口から酸素を求める産声があがつた、

あぶねー、正直呼吸できなくて死ぬかと思つた。

まあ、俺のことはいい、俺のあとに妹も無事生まれてきたみたいだ。

女の子だ、妹だ、ワッショーア。

そして、妹が産声を上げながら静かに目を開ける、いやーやっぱ俺の妹可愛いな。

そして俺と妹の目が合つた瞬間俺は理解した。

確かに意思が宿る、その瞳。

何度も顔を合わしたが、実際に顔見たのは一度だけ。

それでもわかる理解できてしまつ。

- よりしへお願いします、お兄様。

双子だからなのか、なぜか伝わってきたその言葉

それを聞きながら俺は意識を失った。

「あら、 可愛い赤ちゃんですね」 b シ女神様（腐）（後書き）

正直何歳からはじめたか悩んでいますがほんまにほんばります。

誤字脱字感想など書き込んでくれると嬉しいです。

最強の妹と最狂の母上（前書き）

悩んだ末、とりあえず三歳から
理由は、自分も物心がついたのがこのくらいだったかなー
とかそんな単純な理由です

最強の妹と最狂の母上

- なあ、妹よ

はい、どうしました、お兄様

うして、お前は魔王なんだ

とても哲學的な命題ですね。お元様

そんなん大層なもんじゃね――――――――――――――

これが、俺と妹の最初の冗談けんかでした。
あれから、三年くらい月日は流れただろうか、今でも俺は妹に勝つ
ことができないみたいだ。

一
なあ、
サケテ

「やったの、ケレアお兄ちゃん」

「……お前は魔王なんだ？」

お兄ちゃんたって魔王じやなし

「どうわけだ、どこで狂ったのか、はたまた双子として血がつながつてしまつたためか。

俺は、勇者にして魔王という奇妙な存在に成り果てている。

髪の部分に黒のメッシュが入っており、耳は蒼の瞳と金の瞳のオッドアイになっているし、サクラは綺麗な黒髪で前髪に金のメッシュ、俺とは左右対称のオッドアイをもっている。

正直に言おう、黒髪のオッドアイ、しかも金のメッシュを丁寧に三つ編みに結い上げた今、目の前で小首をかしげている少女は、正直めちゃくちゃ可愛かった。

仮面をつけていた魔王時代ならともかく、俺はこの凶悪な可愛さを持つ妹魔王に一度と勝てないなとこの血眼がある。

しかも三歳だこの美貌でゴスロリードール見たいな格好して、小首を傾げてみる。

お兄ちゃん、悶絶死するわ。

念話でしか、意思疎通ができなかつたこの私がんばつたが、もう無理です。

お兄ちゃん、この子がいないと生きていけません。
は、今の笑顔はそこまで考えてのことかなんと言つ策士、お兄ちゃん子のこの将来が心配です。

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「サクヲ」

「はー」

「お母様の、足音がする」

ドバー——ン、毎度毎度、家が壊れるんじゃないか、といつぐるの音を立てて、母親が外に飛び出してきた。

「クレア――――、サクラ――――、お母さんを置いてどこにいったしまったの――――、」

そして、絶叫、ソノガ閑静な森の中にある血出じやなければ、近所から苦情がきそつなほどのおんりょうである。

「おかあさん、ソノコモリです」

クスッと、クレアが人懐っこい笑みを浮かべると、俺意外と話すときの年相応の口調になる。

「クレア――――、サクラ――――、」

母、マリアが、騎士もびっくつのスピードで俺たちの前まで来ると、ひしと俺とサクラを抱きしめて、オンオンなき始めた、こつなるとまだ年相応の体しかもたない俺とサクラには振りほどくこともできず、されるがままになるしかない。

「ははつえさま、なきやんぐだわい、お、ばくとサクラは、ははうえわまがねてこるあいだに、おはのかんむつをつくって、おどろかせようとしただけなんです」

「クレア、サクラ」

もしもの、ために考えておいた言い訳を俺たちを抱きしめて泣きじやくつている母親に打ち明ける、母も嬉しそうに泣き顔を笑みの形に変えながら。

「おきて、一人がいないことのまづが驚いたわ、この馬鹿息子」

罵倒してきた、ええー、今罵倒されるシーンだつけ。

ほめられるとか、そんな感動的な展開は無しですか母上。

実際のところ妹と普通の言葉遣いで話すために、人気の無いところに出てきただけだったので、つかまつて家に帰るのに反対はしないのだが、この後、一応作つておいた花の冠を頭につけた母親に小脇に抱えられ家路につく俺たちであった。

「サクラ」

「はー、おかあさん」

「うなみこ、この冠の作り方は誰に教えてもらひたの?」

「ドロシーである、おかあわね」

正直に、俺達の家のメイドさんの名前を明かすサクラ、

「せう、じゅあドロジー」をつべお説教しどかないとね

「へ、なぜですかははははははは」

「あたりまえでしょ、花の冠のせいで可愛いクレアとサクラが家出したのよ……」

「家出じゃねーよ」

心の中で同時にツツ「なんだ俺達を小脇に抱え、今日も優雅独尊な母が行く。」

いや、普段はかなりの淑女なんですよ。

俺とサクラのことになるとキャラ変わるだけで。

そんな、誰に弁明しているのかわからない、俺達を抱えて母は家路に着いたのだった。

ちなみに、予断だ、両手がふさがった母上が扉を蹴破ったのは。

母上、俺とサクラのことになるとキャラ崩壊するのは、勘弁してくれ。

最強の妹と最狂の母上（後書き）

とつあえず、ほちほちとやつていきます。

誤字脱字感想などありましたら書き込んで下さると嬉しいです。
更新としましては、基本毎日、祝日、休日などはアクア、とグラビ
を書いてるので更新しない場合もありますが、基本平日は短いで
すが一話ずつ落としていきたいと思います、このペースでいつまで
いけるかは不明ですが、お付き合いいただければなと思つていま
す。

魅了する息子ヒストーリングする父親（前書き）

なんか、サブタイトルがもうこうじろ駄目なことになつていまつが
お氣になさりや。

魅了する息子ヒストーリングする父親

- なあ、妹よ
- はい、お兄様
- なぜお前は、【以心伝心】を使いつぶやかないと、普段呼ぶひとに呼称が違つのだ？
- お兄様、ドロシーたちの前でお兄様と呼んでほしいのですか、ポッ
- そんな台詞と共に頬を染める三歳児と、それを見て身悶える三歳児、そんなんあたり前の日常が今日も続いていく。
- 「それで、サクラ」
- 「どうしたの、クレアお兄ちゃん」
- 「クッ、お兄ちゃんも捨てがたい
- お兄様、思考が駄々漏れです
- 「ホン、と心の中で気を取り直して。
- 「今日は、何をして遊ぼうか」
- 「かけっこをしますか、それとも、またお花の冠を作りにいきますか」

- いい、模範解答だ妹よ

- お褒めに、預かり光栄ですお兄様

- それで、結局のところどうする

- 今現在の、自分達の戦力の分析それは必須事項だと思います

ちなみに、サクラ、魔王の言葉使いに違和感がある方もいると思いますので、補足するが。

簡単にいえば、転生によって幼児退行しているのである。あの、しゃべり方、性格は何年も生きて出来上がったものであり、転生当初、特に子供に転生したときはこいつもこんな感じになる。

「そうだね、じゃあ草原に行つてかけっこをしようか」

・ そうだな、広場のほうで体力の確認を行おうか

「わかったよ、クレアお兄ちゃん」

・ わかりました、お兄様それでは、先に行つていますので

「うん、サクラは先に行つていいよ、ぼくは、お父様に許可を貰つてくるから」

・ サクラは、先に行つてくれ、俺は扉の陰に隠れた、ストーカーに話をつけてくる

「うん、こいつてきまーす」

- 賴みます、お兄様

扉の影から、サクラが向日葵のような笑顔を浮かべてとてと走り出したことによって、あせって身を隠す気配が伝わってくる。

- まだまだ、甘いな、お父様

俺も、ひとつ苦笑を浮かべると、父親の書斎に向けて走り出した。その途中、隠れている気配のすれすれを通り過ごしても忘れない。

- おおー、あせってるあせってる

決して急がずに、走つて父親の書斎の扉の前にたどり着くと、俺はノックをして部屋の扉を勝手に開けた。

「じつれいします、おとうさま」

「ああ、よくきたね、クレア」

軽く息を乱しながら、出迎えてくれた父親、見た目は蒼髪でモノクロをかけ魔法使いが好んで着る黒いローブを身にまといた青年、年齢不詳、は転移魔法らしい魔法の名残を一生懸命隠しながら、俺にさわやかに微笑んだ。

- お父様、体面保つために戻りますがですか

もちろん、俺の心の声は父親には届かない。

ちなみに、年齢不詳の某母上様が金髪なのに對して、俺は金に黒のメッシュ、サクラは黒に金のメッシュの髪色のため、一時期、妻が浮氣をしていたんじゃないかと悩んだとか。

まあ、今そんなことはどうでもいい、いまは外にいく許可を得る」とが先決だ。

「おとうさま、サクラとふたりでおそとにあそびにいきたいのですが、よろしいですか」

なぜか、父親が悶えている、何々、「サクラと一緒に時の凛々しいしゃべり方もいいが、したつたらずもたまらない」だと、お父様、安心してください、あなたと俺は間違いなく親子です。

「ああ、ぼくはかまわないよ、一人で遊んでおいで、でもくれぐれも危険なことをしないよ!」
「うっしゃー、言質はとった、後は止めを刺すだけだ。

「うん、ありがとう、パパ」

太陽の様な笑顔に、蒼田のウインク付の感謝の印、

「グハ、イッテラッシャイ」

ちなみに、お父様が片言になつてているのは、ウインクして残つた金の瞳、「魔王の魔眼」には「魅了」の効果があるからだ、両眼そろつているときよりは、その威力はかなり落ちるらしいが、好意を持つてくれている人間に使う場合はそれでも十分だった。

なぜか吐血しながら身悶えている、父親を置き去りに、俺は外に向かつて走り出す。

今日、やることは自分達の今の実力の確認。

それを行えば、これから十一年間の間で自分達がやるべきことが見

えてくるだろ？。

そんな期待を込めて俺は走り始めた。

「ふう、我が子ながら、なんて威力だ」

息子が走り去つて数分、ようやく、意識を取り戻した父親は、部屋の窓を開けると、静かに詠唱を始める。

「さて、いくか、今日はどんなびっくりすることを挙めるかな」

飛翔魔法、操作性の難しさのみを言えば最上級魔法にも劣らぬ魔法を、子供達のストーキングのためだけに発動すると、今日も心配性な父親は空に旅立つていった。

魅了する息子ヒストーリングする父親（後書き）

黄金拍車様わざわざ、誤字の「」指摘ありがとうございました。
これからも誤字脱字感想などありましたら書き込んでいただけたら幸いです。

混成種<ハイブリッド>な俺達（前書き）

その名のとおり今回は、存在と一人がどんな状態なのか、そんな軽い説明です。

混成種<ハイブリッド>な俺達

- 妹よ

- はい、お兄様

- 端的に言おうか

- はい

- 俺達は、弱くなつてしまつたようだ

家から、少し離れた草原の中、俺は、のんびりと座り込むサクラの傍でうなだれていた。

先も言ったとおり、俺達は弱くなつていたからだ、いや、正確にいわば、俺達ではなく、主に俺が。

子供になつてているのだから、当たり前だつて。

そうゆう意味ではなく、『存在』として俺は、弱くなつていた。

簡単に言えば、魔王と勇者、血がつながつてしまつた結果、俺達は存在が混ざり合つてしまつた。

ゆうなら、魔をつかさどるものと聖をつかさどるものハイブリッドである。

しかし存在として、ハイブリッドが成功するわけは無く、非常に不安定な二人が出来上がつてしまつたといえるのだった。

まずサクラ、魔王は、魔族の臂力と無尽蔵の魔力を有した上で、聖属性以外の魔法がすべて使える、魔をすべる王、それがもともとの存在である。

今現在のサクラは、俺の聖属性をほとんど吸収し、全属性の魔法を使えることがわかつた。なに、最強じゃないかって、はつきり言う、

最弱だ。

まず、本来魔法使いは、一属性しか魔法を持つことができない、ほとんどの魔法使いは、己に与えられた属性を極めていき高みを目指す。

そして、その行き着く先には、ほとんど差異はないのだ。

たとえば、水の魔法使いなら、水を物理的に操る事で、飛翔するとも可能だし、火の魔法使いなら、空気を爆発させる事で、空を飛びぶことができる。

つまり、属性が違えども、そのたどり着ける場所は、己の努力、独創性じだいなのだ。

しかしサクラの場合は、違う、すべての属性を操れるということは、そのすべての属性を極めるのにほかの魔法使いの10倍以上かかるということをさす。

全属性が、たどり着ける高みが一緒なため、全属性を使えるメリットはあまり無いのだ。

そして致命的なのが、俺の聖属性を取り込んでしまったせいで、彼女は魔を浄化されてしまっていた。

つまり、今の彼女は魔族より神族、そして神族より限りなく人間に近い存在である。

つまり、魔族の強力な臂力と無尽蔵の魔力というアドバンテージを失つてしまっていたのだ。

そして一番深刻なのが俺であった。

おれ、勇者じゃなくなくなつちやつた。

サクラの、魔族の証である魔性を俺の聖属性が打ち消したため、俺の身体には聖属性が少しも残っていない、その上、消しきれなかつた魔性が俺の身体を侵食したため、今の俺は、サクラより魔族に近い存在になつていた。

しかも、俺がもともと操れた魔法は聖属性のみ、その聖属性が体から無くなつた今。

-俺、魔法使えないじゃん

といつわけで、俺は今現在、絶賛うなだれ中です。

-お兄様、気をしつかり持つてください、お兄様には無尽蔵に近い魔力と、勇者を軽く越える臂力があるではないですか、私なんて、火の玉一個で魔力切れの上に、ここまで歩いてくるだけで座り込んでしまうほど体力が無いのですよ

-魔力があつても、それを使える系統魔法が無いんだよ、しかも、力も強すぎて意識すると制御しきれないし

俺のパワーは、勇者であつたころとは比べ物にならないほど凶悪になつていた、三歳児がそれを実感してしまいます。日常生活では、支障が無いのだが、いざ、剣の稽古でもしてみようかと木の棒を持った瞬間、俺の手の中でその木の棒は木つ端微塵に砕け散つた。

ためしに、広場にあつた大岩を思いつきりぶん殴つてみた、簡単に言おう、爆裂した。

三歳児の、パンチで。

俺が、泣きそうになつたのは言つまでも無い。
うん、これからどうしようか。

とりあえず、サクラは体力と魔力保有量の訓練、俺はこの有り余る魔力の使い道と、ひどすぎる力の制御だな、まあ、とりあえずは明日からだ。

今日は、もう動きたくない。

- ちなみに、お兄様

- なんだ、妹

- さつきお兄様が、大岩を爆裂させたときこ

- ああ、させたときに

- その破片に当たって、お父様らしき物体が上空から落下、そのまま近くの森に突っ込んだのですが、どうしましようか？

- ほおっておけ

混成種<ハイブリッド>な俺達（後書き）

投稿時でPV2756 ユニーク384でした。

皆様、ありがとうございます。

誤字脱字感想がありましたら書き込んでくれたら嬉しいです。

書庫に立づく、妹よ（前書き）

タイトルに反して、今回は妹目線です。
まあ、いまんところは感情が希薄なので、あまり樂しこうできくなつ
ている保障はありませんが。

書庫に行く、妹よ

- お兄様

- ん、どうした妹よ

- どうして、私達はこんなにパソコンとしているのですか

- いい質問だな、妹よ、今からお父様の書庫に忍び込むからね

- どうですか、魔法の技術と知識なら私達は十分持つていると
思いますが

- 知識が偏りすぎていると思うんだよ、俺達は転生する前からこの
三千年間なにがあったのか知らないからな、つまり俺達が魔法だと
思っているものが今でも魔法だとは限らないと思つわけや。

- なるほど、それで、お父様の書庫にどうやって入るのですが、窓
から出れる外と違つて書庫は本が傷まないよう窓が無いのですし、
扉のノブも私達が届く高さじゃないですよ？

-

- 固まる、お兄様でした。皆わぁいんこちは、私サクラは今日も愉快
なお兄様と廊下を歩いております。

- お父様に、あけてもらひ

-お父様が今日出かけているからこそ、私達は書庫に向かっていると記憶していますが

- 母上様に、あけてもらう

-お昼寝中の、お母様を起こした瞬間私達は、一度とお母様の腕から離れられなくなるでしょうね

「アーロジーはおなじやうに

- それが、妥当でしょうね

なら、なぜ、最初からドロシーに頼まなかつたのか。

であるドロシー、カタロニアさん譲りの銀髪に薄い褐色の肌、八歳といつても、可愛い盛りのドロシーに実質三歳、精神年齢不明のお兄様は、あまり迷惑をかけたくないようです。

いまだに遅いとも思えますし、それを嫌がってもしないと思ひますが。

-お兄様

どうした、妹

・「おめでとうございます、ハロシーが」ハリモトにこたえてもす。

ため息をひとつ吐くと、お兄様はその表情を普段の子供らしにもの

に切り替えました。

「ドロシー姉ちゃん」

そう言つて、こちらに氣づいて笑顔を浮かべたドロシーに抱きついていました。

お兄様、楽しそうですね。

「カレン様、サクラ様、今日はどうなされたんですか」

その端正な顔に微笑を浮かべた、ドロシーがお兄様を抱きとめながら聞いてきます。

「うん、サクラと一緒にで、文字のお勉強をしたいんだ、だから、お父様の書庫を開けてもらえないかな」

お兄様、ドロシーの前だと、大人ぶりますわよね。

「書庫ですか、かまわないですが、お一人にはまだ早いのでは」

ドロシーも、チョット困惑気味なようですね。

「お・ね・が・い」

上目使いで、笑顔を浮かべると「魔王の魔眼」なウインク、お兄様それは反則です。

「ハ、ハイ、わかりました」

ほら、ドロシーも顔赤らめてふらふらしてゐじゃないですか。

けつか、扉は開きました。

ドロシーは、だめ、相手はクレア様なのよ、でもこの胸の高鳴りは、
だめよ相手はまだ三歳なんだから、などぶつぶつ呟きながらお仕事
に戻つて行きました。

ドロシー、お兄様を盗つたら、許さないですよ。

おほん、それでは氣を取り直して、本でも読みますか。

「あら、どうしたんだいドロシー、風邪かい？」

お母さんがお料理中の厨房に、戻つてきた私にお母さんが尋ねてき
ました。

お仕事中はとっても厳しいですが、普段はとっても優しいお母さん
です。

「ううん、違うよチョットのぼせりやつただけだよ」

「それが、チョットなのかい」

わたしに、そつくりな顔、口調に似合わないその綺麗な顔を、苦笑
の形に変えると、優しくポンポンと私の頭をなれてくれました。お
母さんの手はとってもあつたかくて気持ちがいいです。

「ありがとう、もう大丈夫だよ、お母さん」

「せうかい」

と、優しい笑顔を浮かべると料理の続きを戻つていくお母さん。それを、見て私もお仕事に戻ることにします。

「あの、ませガキ、ドロシーに手出したら、消してやる」

そんな、眩きが聞こえたような気がしましたが、気のせいだと信じています。

書庫に行いや、妹よ（後書き）

幼少期は、ある程度の力の説明
子供時代は、ある程度の力の使い方を覚えていく時間
そして、十歳で学校編を始めたいと思っています。
今のところ、予定なので、そこまで、たどり着くのにどれだけかかるかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。

誤字脱字感想などがありましたら書き込みをいただきたいです。

考察する二歳児と、わずかに見えた光明（前書き）

ふむ、もう題名があれな感じですが。
書きたくなつたので、今日一話田です。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明

-妹よ

-なに、お兄様

-この文字はなんて読むんだ

-これは、火炎球みたいで、古呪魔法>ルーンスペル<で言つて
ころのファイアーボールだと思うのですが

-マジか、何でこれが中級魔法になつてるんだ、ファイアーボール
なんて火属性の基礎の基礎じゃなかつたか？

-それが、今のレベルなんだからしうがない、でもそのおかげで、
魔法が使えるかもしないんだから文句を言わないで

俺達が、書庫にこもるようになつてから一ヶ月くらい経つていた。
今では、お父様が出かけるとドロシーが、書庫の前で俺達を待つて
いてくれるくらいである。

ちなみに、俺達がもともと使つていた魔法は古呪魔法>ルーンスペ
ル<と呼ばれていて、今は、古代研究を生業にした学者達が調べる
程度のものに成り下がつていた。

ちなみに、古呪魔法>ルーンスペル<は力ある文字、古呪に魔力を
込め、発動させる。「我放つ聖光の一撃」『セイクリッド・プラス
ト』なんかがいい例だと思う。

つまり、力ある文字で事象を改変するそれが俺達が使つていた古呪
魔法>ルーンスペル<であった。

今現在、魔法と呼ばれているのは、魔方陣に魔力を流し込んで使う系陣魔法 > エレメンタルスペル > 呼ばれるもので、魔法であり魔法陣に魔力を流し込む事で、魔法を発生させるようだ。

ちなみに、魔法陣を作り出せるほど的力量を持つたものはほとんどいなかったため、新魔法が一年に一個できればいいほどだといわれているらしい。

系陣魔法 > エレメンタルスペル < の、よい所をあげるなら、古呪魔法より圧倒的に魔力の消費を抑えることができるようになつたことらしい。

たとえば、同じファイヤーボールを使うだけでもその魔力の消費量は、半分以下だというわけだ。

それでもうひとつは、魔力さえあれば誰でも使うことができるということらしい。

もちろん、一人一属性という原則は生きているらしいのだが、魔法の質を大幅に落とした結果、中級魔法程度までなら誰でも使えるらしいのだ。

もちろん、上級魔法はその系統保持者にしか扱えないそうなのだが。中級魔法程度は、その強さは込められた魔力の量で決まる、魔力を一必要とする魔法に十をつき込んでも威力が十倍になることは無いが、大体半分の五倍程度にはなるらしい。

まあ本来は、こんな魔力の無駄をするくらいなら、己の系統を極めたほうが早いので、こんなことする馬鹿はいないそうなのだが。

俺は、今、自分の系統を失つており、その馬鹿のことをできるだけの魔力があった。

これは、試してみる価値がありそっと心に刻んでおく。

まあ、今やることは、この大陸文字を完全に読めるようになる」とだが。

なに、読めているじゃないかって。

これは、妹と二人で、一ヶ月間「古呪文字読解」とゆう辞典を片手に、ウンウンうなつた成果だ、古呪文字は読める俺達だったが、三

千年経つて公用文字が大陸文字と呼ばれるものに変わっていたのだ。なに、なぜ大陸文字の辞典じゃないのかって。そんなもの読めるか、古呪文字で書かれている辞典がこれしかなかったから、古呪文字から逆引きしたんだよ。

おかげで、ある程度覚えるまで一月もかかつてしまつた。とりあえず、しばらくは部屋で子供用の童話でも読んで、読解力をつけようか。

サクラは、積極的に辞典を開いていたせいで、軽い学術書程度なら読めるようになつてしまつたようだが、さつきの知識もサクラから教えてもらつたものだ。

まあ、とりあえずこれで方針は決まった。

サクラは、魔力保有量を増やすことだ、体力の問題もあるにはあるが、今の身体ではどうがんばたつて限界がある、それなら体力のほうは体の成長任せで、魔力を少しでも増やしたほうがよいだろう。とりあえず、今は、系陣魔法>エレメンタルスペル<の練習もかねて、魔術書「悠久の闇」を片手にぶつぶつやつている。

何個か、魔力保有量を増やす方法はあるのだが、はつきりいつて、魔法を使い続けるて魔力を空にする、それを繰り返すのが一番危険性が少なく身体への負担も低い、サクラは今そのまま思つたとおりにやらせるのが一番いいだろう。

もちろん、積極的に遊びに連れ出した体力をつけさせるのも忘れないが。

俺は、そうだな、さつさと文字を覚えてこの世界の勉強でもするか。なんかお父様の書庫を見てたら「魔王と勇者についての考察」なんて、気になる題名の本何かちらほら出てきたしな。
後は、この有り余る力をどうするかな、いやまじでどうじよつ、三歳児なのに素手で林檎とか握りつぶせるんだぜ。

とりあえず、力の制御と、勉強だな。

いやー、勤勉だね最近の三歳児は。

考察する二歳児と、わずかに見えた光明（後書き）

えーと、わざわざ評価ポイントを入れてくださった方、本当にありがとうございます。

感想などもいただけた嬉しいです。

それでは、誤字脱字感想などお待ちしております。質問でもいいですよ、それがいいインスピレーションになる場合もあるので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6833y/>

最強のN P C共（仮）

2011年11月23日20時57分発行